



評論家ごっこ

永 六輔

ひょうろん か
評論家ごっこ

えい ろくすけ
永 六輔

© Rokusuke Ei 1992

1992年10月15日第1刷発行

1993年4月5日第2刷発行

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-3626

製作部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

製版——豊国印刷株式会社

印刷——豊国印刷株式会社

製本——加藤製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内
容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いい
たします。(庫)

ISBN4-06-185250-7

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。



講談社文庫

評論家ごっこ

永 六輔

講談社

まえがきごっこ

考えてみると、僕はごっこで生きてきた。

作詞家ごっこ、タレントごっこ、ボランテニアごっこ、旅人ごっこ……。

ごっこだから、飽きると、すぐやめた。

気が変わると、また、はじめた。

子供の頃から、ごっこ一筋五十年。

二十年を迎えた「夕刊フジ」から、一年目があなたのコラムの連載だったから、二十年ぶりに再びという話があったとき、迷わず「評論家ごっこ」というタイトルにした。

「ごっこ」とつけば、五十年のキャリアがあるプロである。

嘘がすぐばれたりするアマチュアの政治家ごっことは、わけがちがう。

毎日が評論家の連載ごっこが、はじめた。

目次

まえがきごっこ 3

あきんど大学評論家

10

評論家評論家

12

新人評論家

15

一人ツ子評論家

17

いろいろ評論家

20

箸の持ち方評論家

23

正座評論家

25

トイレットパー評論家

27

薩摩芋評論家

29

チョコレート評論家

32

タマゴ評論家

35

土曜日評論家

38

責任評論家

40

刑務所評論家

43

乳首評論家

46

女の時代評論家

48

歯科医評論家

51

防寒耐寒評論家

54

正月料理評論家

57

緑茶評論家

59

ドーナツ評論家

62

ウェディングケーキ評論家

65

ハタチ評論家

68

売れツ子評論家

70

歌唱力評論家

73

平均寿命評論家

76

日比谷公園評論家

78

禁煙評論家

81

道歌評論家(一)	83	話芸、話術評論家	124
道歌評論家(二)	85	二世評論家	127
古典芸能評論家	88	演説評論家	129
古代遺跡評論家	91	絵葉書評論家	132
八大評論家	94	出産評論家	135
検便評論家	96	ストップ評論家	138
桃太郎評論家	99	チャンバラ評論家	140
おすぎとピーコ評論家	102	オバタリアン評論家	143
スポーツ新聞評論家	104	雌雄評論家	145
欲求不満評論家	107	自然保護評論家	148
タクシー評論家	109	BCN評論家	151
農村花嫁評論家	111	呼吸評論家	153
無名スター評論家	114	弔辞評論家	156
有名税評論家	117	葬式評論家	159
玉王評論家	119	ユニフォーム評論家	162
句会評論家	121	天才評論家	164

上座下座評論家

167

映画評論家

170

敬語評論家

173

家元評論家

176

女大学評論家

178

矛盾評論家

181

お父さん評論家

184

食べもの評論家

186

排泄評論家

190

方言評論家

192

電話評論家

195

本牧亭評論家

198

職人評論家

201

ホームステイ評論家

204

信仰評論家

206

遺書評論家

209

未亡人評論家

212

発情期評論家

215

ホテル評論家

217

改札口評論家

220

デブ評論家

223

ハゲ評論家

225

ボランテニア評論家

228

SKD評論家

231

中華街評論家

233

博覧会評論家

236

老舗評論家

239

マラソン評論家

241

国技評論家

244

痴漢評論家

246

一億円評論家

249

怒鳴り方評論家

252

麻薬評論家

255

マジック評論家

258

食卓評論家

260

テーブルスピーチ評論家

263

野球中継評論家

265

ゴールデンウィーク評論家

268

スポンサー評論家

271

浪花節評論家

273

政治家評論家

276

ごっこ評論家

278

あとがきごっこ

282

文庫版へのあとがき

283

本文イラスト 浜本ひろし

單行本は一九八九年 小杜刊

評論家ごっこ



僕は、今日から日替り評論家としてデビューする。

したがって毎日肩書がちがうわけで、今日の僕は、「あきんど大学評論家」。

「あきんど大学」は、このコラムの前任者、藤本義一サンのタイトル。

大阪商人の合理性、東京商人の見えつぱりと、やせ我慢がテーマだった。

大阪と東京のちがいを名古屋のバス駐車場で聞いたことがあるが、大阪から来る団体バスは何台来ようが整理しやすいが、東京から来る団体バスはそこがむずかしいという。

ここまでの話で理由がわかる読者は、商人としての目先もきいている。

たとえば、東西から五台ずつバスが連なってくるとする。

合理的な大阪のバスは先頭が五号車の表示で、見えつぱりの東京からのバスは先頭に一号車と表示してある。

つまり、東京からのバスは、あと何台来るのかわからないのだ。

東から西を見る。

西から東を見る。

ともに大切なのだが、真ん中から、東西を見ることも、また重要なことで、これが評論家の仕事なのである。

閉店間近の店がある。

大阪人は「まだ、やっとなるやろ」と、店の中に入る。

東京人は「もう終わり？」と、のぞき込むだけである。

この両者の言葉の差が、商売の上では大きな差になる。

東西の比較は藤本義一と永六輔にも、そのまま当てはまるところがある。

昭和八年生まれ。

妻一人、娘二人。

ここまでは共通しているが、アチラは直木賞作家で、コチラは雑文家。

アチラはテレビで、コチラはラジオ。

困ったことにこの二人は親戚でもあるから、何かというと「六輔サン、少しは義一サンを見習いなさいよ」とやられる。

仕事の上で共通しているのは、旅が多いことだろうか。

藤本義一サンは世界中どこへ行っても、

「ここは大阪でいうたら天王寺や」「ここは大阪でいうたら十三^{じゅうぞう}や」

と、どこだろうが大阪にしてしまう。

逆に、僕は、どこへ行っても相手の町に自分を埋没させる努力をする。

「東京でいえば原宿です」とは絶対に言わない。

藤本義一さんは、このコラムを引き受けるときに「原稿料はなんぼや」と聞いてから引き受けているはずだ。

僕は何も言わずに、せめて彼と同額だといいなアと念じ、もし少なくとも直木賞をもらってないからと諦める。

東京―大阪、新幹線でたった三時間のこの距離が、いつになったらちぢまるのだろう。

というわけで、江戸前の、見えっぱりの、やせ我慢の文章を読むことで、東京人を理解していただきたい。



今日の僕は、日本に一人しかない「評論家評論家」。

政治評論、文芸評論、美術評論、野球評論、競馬評論などなど、評論家は花盛り。

「一億総評論家」と言われて二十年たっている。

二十年といえば夕刊フジが創刊された年に、このコラムを担当したのを思い出す。

タイトルは「右や左の旦那様」だった。

そのときの担当記者が入社早々のお嬢サン。

いまは産経新聞で健筆をふるっている千野境子ニューヨーク支局長。

海外取材も豊富なベテランのジャーナリストだが、当時はしめ切りがギリギリになると涙ぐんだりした。

泣いていたお嬢サンが評論家で、泣かせた僕は評論家ごっこ。

早い話がお医者様ごっこ。コソコソしたお楽しみだ。

「コラッ」と叱られたら逃げ出す評論家なのである。

たとえば映画評論家がどう賞めたって、観客動員には何のタシにもならないというレベルだ。

全国の野球ファンが、いまやファンというより野球評論家になってしまったように、誰だって何かの評論家になれる。

会社の中での定年評論家、家へ帰れば女房評論家。

会社の往復にはラッシュアワー評論家であり、一杯呑めば、酒の肴評論家である。

たとえば、酒の肴の特殊なケースは田中小実昌サンの場合で、彼は輪ゴムを醤油にひたして、クチャクチャ噛みながら酒を楽しむから輪ゴム評論家でもある。

その田中小実昌サンは路線バス評論家としても著名。

とくに田舎の路線バスが終点で方向転換するときのドライバー技術に詳しい。

こういうユニークな評論家を発掘することも重要だ。

僕の知人友人にはこうした評論家が多い。

セーラー服評論家の小沢昭一。焼芋評論家の上月晃。淡水魚評論家の坂田明。うな井評論家の淡谷のり子。へら鮒釣評論家の江戸家猫八。オートバイ評論家の柳家小三治。ライオン評論家の松島トモ子。天気図評論家の前田武彦。ファンデーション評論家のピーコ。バーテン評論家のおすぎ。もういくらでも紹介できるのが嬉しい。

と書いてきて気がついたのだが、○○評論家という表現で僕が「チンピラ評論家」と書くと、チンピラの評論家で、チンピラを評論するとは思ってくれないのが困る。

未亡人評論家もいるのだが、これも未亡人の評論家ではなくて、未亡人を評論するのだと理解してほしい。

黒柳徹子を独身評論家という場合も同じである。

最近彼女は、「どうして結婚しないんですか？」という質問が「どうして結婚しなかったんですか？」という質問になった点について、こだわっている。

つまり、まだ結婚するつもりらしいのだが、こういうこだわり方が評論家の資格だ。

あなたが、僕について意見を言えば、それで立派な「永六輔評論家」になれるのである。

今日の僕は、「新人評論家」。

この本のカットは新人浜本ひろし。

浜本ひろしは、この仕事を引き受けるとき、「やっと親に認めてもらえる」と言った。
初対面だった。

僕は時々、武蔵野美術大学で先生ごっこもやっているが、その教室でカットを募集、現役や卒業生の作品から選ばれたのが浜本ひろしだった。

このコラムは人気イラストレーターが引き継いできて今回初の無名の新人だ。
誰だって無名の新人だった。

無名だった僕に作詞のチャンスを与えてくれたのは故中村八大、それが第一回のレコード大賞になって、ちよつと有名になれた。

学生だった僕を呼び出して、コントを発注してくれた三木トリロー。
そのおかげで放送作家になれた。

昔を思い出して、二十年ぶりのこのカットは無名の新人、という条件をつけた。

